

# 地域に根ざす大学開放の試行

## ——岩手大学農学部への開放活動から——

石 川 武 男

表題の報告に関する資料は、「農民の子の発達と教育—岩波講座子どもの発達と教育第8巻所収—」<sup>(1)</sup>「農民のための農学部へ—岩波・世界12月号1977年—」<sup>(2)</sup>「地域に即した公開講座—現代の高等教育No.201 1979年7月号—」<sup>(3)</sup>です。これらの資料を横断的に報告させていただき、ご批判を得たいのでございます。

### 1 農学部開放のはじまり

はじめに、岩手大学の公開講座について、若干の経過を申しあげておかなければなりません。岩手大学では、以前から教育学部や工学部でそれぞれ公開講座をもっておりまして、この公開講座が1970年来の大学紛争時に、官学協同ということで、学生達との紛争対象になりました。受講生の中に一部学生が入って、受講料の公開とか、講義内容について、質問せめにするなど、運営がむずかしいほどの混乱が生じました。公開講座を継続する状況ではなくなってしまいました。大学としては「公開講座検討委員会」をつくって、講座のあり方について討議いたしましたものの、積極的な方策が生み出せないまま、開店休業となってしまいました。そして1977年、農学部が第1回「営農技術大学公開講座」を開講するまで、公開講座はtabooの状況であったわけです。

農学部では、かねてより、「営農技術学科」という、自営農民の教育を専門化する学科新設の構想をもっていました。<sup>(4)</sup> この構想への実現からも、それを一歩でも前進させるためにも、農民を大学のCampusで学習させる必要を考えまして、さらに、岩手大学公開講座の停滞について、そのモデルを提示する必要もありまして、「第一回、営農技術大学公開講座」を企画したわけです。

農学部が主催する公開講座ですから、その学問の性質上、受講生を「農民」と「第一線農業指導者」に限定しなければなりません。さらに教授会としては、「営農技術大学公開講座」の開講の意義について、農民にappealを出し、求学、求農の「のろし」としなければ農民はよりつけません。まことに、農民から見た大学はそれほど疎遠であり過ぎたのです。教授会appealは次のものです。

『21世紀に向かって人類は世界的規模の食糧危機に遭遇するといわれている。各国は競って食糧資源を求めて止まない。奮起する農民の世界的脈搏が伝わってくる。一方、現代は遠洋漁業が壊滅的状况にある。ダイズ・トウモロコシ・小麦など、穀物生産はもとより、畜肉の需給体制を整えなければ、国民の栄養水準を維持できなくなる。われわれは生産を再生し、地力を高め、農民生活の独自性を発見しなければならない。営農における《新しい技術の創出》を心がけ、来たるべき時代を準備しなければならないと思うのである。盛岡高等農林学校以来、80年近い歴史

(1) 石川武男(1980)「子どもの発達と教育」第8巻、「発達の記録と分析」所収、岩波講座。

(2) 石川武男(1978)「農民のための農学部へ」「世界」12月号、昭和53年

(3) 石川省男(1979)「地域に即した公開講座」IDE、7月号、No.201。

(4) 石川武男(1977)「思を求める」(家の光協会発行)「農民と大学」P.245~276に詳しく書いてある。

をもつ、岩手大学農学部が、農民各位にその講座の一部を公開し、ともに新しい営農の視点を探求しようと《営農技術大学講座》第1回、《営農技術の中の畜産とくらし》を企画した……」そして教授会は岩手県農政部、岩手県教育委員会にも積極的に連絡をとり、農民募集については地方行政機関の組織を通じて多くの協力がえられるようにいたしました。

## 2 農民開放への考慮

講義は18学科目、3ヶ月にわたって、14日間といたしました。受講生は農民とのその指導者に限定いたしました。市民から受講希望が出ましたが、それは資格審査でお断りするわけです。農民だけが農学部に触れることが必要であって、家庭菜園をやっている主婦などの受講は農民の経営規模とちがう対象として除外いたしました。これは、受講する農民と農学部の「血のつながり」意識の昂揚を考慮してのことです。これは勉学にとって基本的に必要でした。3ヶ月にわたる受講期間の設定に当っては、はじめの月には、主として畜産の技術的課題に集中いたしました。例えば「乳牛の栄養と障害」「放牧病」「飼料の諸問題」「獣医師の来るまで」といった学科目を配置いたしました。農民が受講し易いように、最初の月は具体的技術問題を考慮いたしましたわけです。

この7月の受講生が8月に進級してゆきます。8月は「地力」「農地基盤整備技術の展開」「生長調節物質の働き」といった、広い技術内容に高めることを考慮いたしました。こうして次の9月に進級するのですが、講義科目を抽象的次元のものに高めます。例へば「日射エネルギーと作物の生産性」「タンパク食糧と育種」「エネルギーエントロピーと農業」といった学科目から「農村の伝統」「農民の生きがい」の問題へと進めて、修了へといざなうわけです。以上のように、受講農民への学科目配置に考慮してありますのは、営農技術の中で、目に見える技術から始めて、次第に目に見えないものへの知的関心への誘いであります。

岩手県は四国四県を一県にしたほどの広い県です。募集100名に対して、156名の応募で、3ヶ月にわたって受講を通したものは、143名、実に91.67%の受講率であります。岩手県内だけでなく、近県の宮城県、山形県、秋田県、青森県からも泊りこみの受講農民が集ってきました。東京から受講した老人もいます。教授会 appeal を刷り込んだ、「募集のしおり」は1千部印刷いたしました。全部出て増刷するほどでした。

岩手大学農学部は、明治35年に開校した、わが国、唯一の盛岡高等農林学校が前身で、80年の歴史をもっています。といたしましても、農民の教育とか Campus の農民開放について、ほとんど無縁といってもよい、そのような関係でありました。この大学が、いま、農民に、しかも農民にだけに、門戸を開放するということは、農民の求学心と求農の熱意に火がとばされたということでしょう。私も、農民のその熱意に深く感動させられてきました。そこで、「営農技術大学講座」の修了証書について農民的配慮を行ったわけです。国立大学の印を、修了証書に金箔で印刷し、すかしの入った大型の証書に、『～求農の熱意を讃え、ここに修了証書を受与する～』と書き添えたのです。証書に力を込めましたのは、その証書を手にして農民が、営農の困難を日々克服する気持のたしかめとか、励ましになればと配慮したつもりでございます。この修了証書は、農民の中で大変評判のよいものでした。大学にはじめて触れえた農民自身の喜びでもありましょう。

修了証書の授与式は、学長、知事(代理)、教育長、農業団体、そして講義担当の先生達の列席のもとで行いました。私は農民に対して、旧制の盛岡高等農林学校校旗の半旗をかがげ、80年にはじめて、農民を学習者として招き入れることになった、そのことについて、学問の

ひとりよがり、ごう慢について心からお詫びし、農民が農学部に向かって今後は、むらがるように集ってほしいと申しました。受講農民はその直後、「岩手大学営農同窓会」を結成いたしました。彼らは「農民大学」という機関紙をつくり、農民と大学、農民相互の連帯を強めているのでございます。

### 3 Campus を出ての公開講座

金沢大学にも、前身校からの歴史があって語り伝えられます。岩手大学にも、岩手師範から100年の歴史があり、盛岡高等農林学校からの80年の歴史があります。けれどもそれは、学校や大学としての歴史でありましょう。農学部の歴史に限っていえば、80年という時間の流れは、学校としての歴史とか歩みの、それは単なる時間の推積であります。農民とか農業の側からみれば、歴史ゼロで、その国立機関は、農業、農民のものになっていない歩みといえます。学校の歴史として、たとえ自画自讃として、それがどんなに立派であろうとも、農業、農民を励まして、一体となって共に歩む苦難の歴史や、それを克服する学校ぐるみの曲折の筋があったわけではありません。もちろん、盛岡高等農林学校には教師として、横井時敬博士や鈴木梅太郎博士など、農業、農民に実学でこたえた学者も少なくありません。しかし、彼らも農学者として孤独の中にあったわけです。卒業生の中でも、宮沢賢治とか、松田甚二郎の孤独と絶望の生涯もあります。多くの卒業生が、日本各地でそのような働きを行ってきたことは、日本の体制のもとらる農業、農民への矛盾の中に苦しんだ事実であります。けれども、それが学校とか、大学の歴史として語られるには、教育機関はその苦痛の外域にあった歴史という、時間の積み重ねでしょう。時間が単に経ったというに過ぎません。農業・農民を大学農学部の Campus の中に入れて、私は彼らと共に農業の科学を交流しあうことが、開放だろうかと思うのでした。農業・農民に対する、大学の対し方において、それが真に農業・農民を内に包んでいることであったろうかと痛く反省させられたのであります。大学の Campus に農民を集めて、教師が研究室から、時間とともに講壇に上るというし方では、真に、農業と農民に共鳴する科学を教育したり探求はできません。農業・農民の生産の現場に、われわれの Campus が移り住んで、「学問や技術の場」を設定することから、つまり、野に立つ大学の「初心」にかえて、公開講座を展開しなければと思うに至ったわけでありました。Campus を出て、農業・農民の生産の field において、大学農学部は、農学部の教育の旗をたてようと考えました。

とは言っても実は事務がたいへんになってきます。講座の企画・連絡や講師の世話など、事務局と農学部の事務が、これを担当するのです。その事務量をどのようにするかは、最初の大い難点の1つでした。この支援をどのように円滑化するかの問題がございました。私はこれを、農民の側から考えなければならないと思いました。これらの企画は社会教育の運動の一つでもありましょうから、現有の農民団体等々と事務的なことも協力し合うことを考える必要があります。大学の事務体制と町村単位の農業協同組合との共同の仕事をどのようにするか、その仕方を、教授会として相談しました。学外に出した公開講座は単位農協等と事務の共同を条件としました。水沢市農協から希望が出てきましたので、その要望に沿って農学部は水沢農協と手を組みました。ちょうど減反期でありますので、水田単作地帯の農民の呼びかけにこたえることにしたことは申すまでもありません。

教授会としては、主要なテーマを、その年々の農村の実状に相応するよう講座の主題を決めております。そして主題にふさわしい農民への appeal を出すことにしました。appeal をもった学生募集の印刷物を地域の農民に、農協を通して配付し、受講生を求めるわけです。第1回

目もこのスタイルで行いましたが、特に地域に出る場合は、その地域の特徴ある農業経営の問題、これを中心とする主題を選んで、それに対して教授会がどんな気持で、テーマに即して、公開講座を展開するか、appealはそのような主旨をもち込んであります。主題は「複合経営と技術」で、教授会 appeal は『営農の自立の方向として、「複合経営」が重視されるようになった。「複合経営」とは一体なんだろうか。「複合経営」の創出にあたっては、営農における技術とくらしのあり方が、まず問われなければならない。さらに、農業生産の将来の見通しをしっかりと見さだめることで、はじめて、農民の生産と生活の道標としての複合経営が画かれよう。

「複合経営」とは、譲ることのない農村のくらしや生産の創出である。なによりも農民が尊重され、農業労働に生きがいを見出す経営のあり方の農民的探求である。この課題を具体的に検討してみよう。そして今日の農業をめぐる、まことに困難な状況を、はね返す力を互いにたしかめあってゆこう。こう考えて本年は、講義の主題を「複合経営と技術」にしばって、4日間の連続講座を展開することにした。』というものです。

この水沢市の第2回目も、非常に好評でした。そして毎年来て欲しいという強い要望が出されました。珍しさも手伝って、NHKの「明るい農村」等でこれを取りあげていました。テレビでアナウンサーが受講生をつかまえて「現場で、大学の先生のむずかしい講義を、農村の人たちが、机の前で、ずっと5日間も聞くということは、たいへんな苦行難行でなかったらうか」ということをマイクをむけて質問していました。農民の答は「とんでもない話だ。時間のたつのが早いくらい」と返事がかえってくるほどでした。農民は講座に対して言いたいこともあったらと思うのですが、せっかく来た大学に対しての礼儀作法を心得てあるいは、そう言ったかもしれません。

ともかく、地域の農民としては、大学からわざわざ来てくれることについて、いろいろ意見はあるにしても、対外的には大学を心から歓迎する表明がなされました。大学の先生が、公開講座指導に、わずかな費用で文部省の実費をつかっておいでになってくるということについて、農協は各先生に「おみやげ」をつつんで渡すというようなことまで配慮していました。また県の教育委員会、社会教育、或いは県の農林部等は宿舍の準備、それから駐車場の確保等全部をひきうけ、大学の事務も、現場に出て共同の仕事を体験できました。事務的には非常に困難なことがありますけれども、献身的に支える農民や農協、それに社会教育関係の人びとの助けで事務としても大きな励みができたわけです。この協力なくして、公開講座は絶対に成り立たないことを痛切に感じました。

で、やはり、この水沢市も「営農同窓会」を結成しております。特にこれを機会に農村青年等が大挙して大学に訪ね、新しい果樹の育苗等の実施指導等を受けています。

大学と農民との深いつながりが、第2回目にも密度の高い形でできあがってきました。そうしたことが、知れわたってゆきますと、岩手大学農学部への公開講座に対して、わが方に来いと言う要求が、学部長の手もとに届いてくるわけであります。年に一回の公開講座を待ちきれなくて、農業協同組合が自主的に「営農大学」を企画することになります。農協法第10条に基づきますと「農協組合運動は、農民の資質の向上に協同の事業を行わなければならない」と書いてあります。現在の農業協同組合としては、流過程或いは集荷、或いは金融関係、雑多な仕事雑多な形で入ってきています。農民の資質の向上等に協同化運動を展開するということは、その人的体制として不可能に近いといえます。そこでわが農学部教授会としては、この農協法第10条に基づく農民教育の支援体制に協力するという態度を明らかにして来たわけです。例えば、一の関農業協同組合は大学の公開講座をまちきれないために、「一の関農協大学」という2ヶ

年課程で、専業農家育成をはかる教育運動を始めました。そのプランそれからカリキュラム等を全部大学農学部へ委任するという事で、一の関農協大学の学長に私が就任し、さらに農協組合長が副学長になるということになりました。農協の中に大学運営の企画部ができて教務一切を担当していきます。そして教授会との連携に努めるようになりました。約50人の専業農家の青年が、制服まであつらえて、発足いたしました。そこで教授会としては「一の関農協大学」の2年課程に対して、第3回目の公開講座をドッキングさせ全面的に支援することにいたしました。その「一の関農協大学」の講義は月に2回とか3回、農閑期は若干多くなりますけれども、气象台の人、或いは東北大学、岩手大学、関係者の講義を、2ヶ年にわたってつづけていく編成です。それに加えて第3回目の公開講座がドッキングして集中講義の形をとります。第3回目講座は「一の関農協大学」を軸に、その付近の受講希望の農民に参加を促すことを行ってきました。主題は『転作時代の技術の探求』です。水田地帯の当面する問題にしばったわけです。「技術の探求」をどんな心のすえかたで行わなければいけないのかを、第2回目と同様に、教授会 appeal にもり込みました。その主題「転作時代の技術の探求」における appeal は『旧制盛岡高等農林学校教授小野寺伊勢之助博士は、一関地方の生まれであった。博士は緑肥農法の先覚者であり、自給肥料の技術を広く普及させ、また、堆肥の研究において世界的に著名な方であった。先学のこのゆかりの地において、第3回の「営農技術大学講座」をひらくことになった。とき、まさに「転作時代」のさ中である。転作は稲作にとって非常な措置であり、禍いと言ってよい。けれども農民がその禍いを、禍いにとどめては、これからの営農に展望をひらくことはできない。石油づけの農法を克服する、逆転の機会でもある。機を逃さず「転作時代」における技術を探求しあってゆこう。農民の技術を、多角的にとらえ直し、変貌する時代に立向う力にしよう。この自立する技術の探求にこそ「禍いを転じて福となす」道がひらけてこよう。農民技術の夜明けがおとずれてくる。』と訴えました。

第3回目も100名の募集に対し、154名入りまして、最後まで授業を、講義を聞きましたのが、141名です。女性の参加も少し出てきました。そしてびっくりしたのは年令構成等を見ますと、かなりの高齢者も参加いたしております。とくに第2回目のときは、地元の県議員さんが参加されました。自民党の幹事長であり、東京文理科大学を出た県会議長が、奥さんは東京女高師を出た人でしたが、ご夫婦で机の一番前にすわって、ノートをとっていました。農民へのこれほどの励ましはありません。地元の主な人たちといえる、そういう指導者が、わざわざ公開講座に出席し、生徒となって欠席もなく来られることがあったのです。これは青年達や婦人たちの受講に対する態度を非常に積極化し、大きな励みになったと強く思っています。

一の関農協大学も公開講座の同窓会を結成しまして、分厚い文集まで発行しています。

第4回は北上市の農協が誘致いたしました。北上市の地域も酪農だとか、果樹、一部水田という地帯です。教授会としては、「農業復権の生産と生活」を主題にしました。昭和55年の状況ですので、農村自身が、冷害を受け、被害者意識を強く持っている、これをどう逆手にひねって、元気づけるかがありますので、第4回農民への appeal は『北上、和賀、湯田、江釣子及び沢内村一帯の農業は、和賀川の右岸、左岸、さらに湯本、沢内の源流をふくめて、岩手の穀倉地帯と言ってよい。それは、農民の幾世、幾代にわたる辛苦の結晶である。三百年前、奥寺八左エ門は、この地の農業開発に和賀川を手なづけ、流域の、ゆるぎない農業の基盤を築いてきた。昭和の初期、第一次コメ過剰時代に和賀川の農民は自力によって1,200 ha にわたる造田開発をなし遂げている。戦後、湯田ダム建設以来、地帯はさらに一変した。みどり濃き水田が広がった。新しいかんがい方式が生まれた。複合経営も育った。自然農法の先進地とも言われて

いる。この地域の歩みは、和賀一帯の農民が天下に誇る地域づくりである。地域先輩の歩みから多くを学び、「農民受難」の時代における農業復権の道標を樹立しなければならない。それは、地域が、あい寄り、あい助け、共に学び、生産と生活における農民の英知を醸酵させる方向でなし遂げられる。第4回講座の主題はそこにおかれている。』でありました。この地域は災害を受けやすい地域です。けれども歴史的にみますと、川をうまく制御して、扇状地帯を開墾してきた誇りある穀倉地域です。この先輩農民たちの歩んだ、困難を appeal の中に織り込みました。北上市農協は公開講座の全面的な支援を行います。大学の地域に果たす役割の大きさを改めて知ったわけです。単に知識の切り売りではなく、農民としての誇り高い気風を作っていく、そして地元の指導者も加わった学習の中で農民が励まし合ってゆくことを評価したいのであります。

しかし、農学部だけでやっていくということも婦人の参加が多くなってくると、さらに教育の中味を広げてゆかなければなりません。教育学部にもお願いをして、「子供の教育」の問題を入れて、教育学者に参加をしてもらいました。これも農民に深い感動を与えました。

北上市農協では、公開講座を終わってから、大学の学生諸君がやる大学祭に生産物をもって参加してきました。大学の農学部Campusの中で農民が、りんご、肉、野菜を持って来て、主として公開講座の同窓会の農民たちが、市民に新鮮な野菜、その他を売る試みがなされました。このことは単に技術を受講の成果としてうただけでなく、自分たちの生産物を大学の Campus を使って売ってみることで成果を確認するのです。この農民参加の大学祭によって、政治運動やそれに類似の教条主義一辺倒でなく、農民たちの諸要求を真剣になって聞いて、市民運動を展開してゆく地域と大学の祭になったことは成果でありました。学生も手伝います。テントを張ったり、或いは縄を張ったり、或いは立看板を書くとか、農民代表と学生諸君たちとの会合等をもっております。

昨年の11月の大学祭は農民がトラックで乗り込んで、Campus の青空市場を展開したわけです。ゴボウからキャベツ、りんごから野菜が並びまして、学生が呼びかけのマイクをもち、市民の人気でしてたちどころに売り切れる。すぐに電話を入れて次の出荷を待つというような、実にたいへんな盛況でした。学生の大学祭の方がマンネリ化して農民の方が勝った形をとった位でした。これが与えた学生への影響力は、非常に深刻であったと私は見ているわけです。農民は非常に感激しまして、鬼剣舞という伝統芸能を披露いたしました。これは岩手の農民の踊りです。

今年の農民同窓会は、11月の大学祭に、何をどのように売れるか、従って今年の畑作、その他の作づけ形態は大学祭にむけて考えるというように、11月1日から3日、4日、5日くらいに収穫する、その期間の青空市場に向けて、北上市農協を中心として本年度の野菜づくりは、計画されている筈であります。

そしてこの同窓会は、単に大学にものを教わるだけでなく、もっと自主的に自分たちで公開講座を編成して、大学の先生たちをよんで、月に一回講義を聞こうということにしております。つまり、自主的な団体、学習組織としての同窓会をつくる、というように変わって行ったのです。

ともかく、そういう農民への公開講座の4回目を通して、大学は、農民に向かって足らない部分を補っているように、受けとられやすいわけですが、そうではなく、実は大学の先生は、ある程度のことしか知らないということも少なからず、また当然のことながらある。しかし大切なことは農民を勇気づける大学教師の社会的役割もあるわけです。特に大学の先生が、学生

に講義をしていくのとは違って、講義の準備を別に整えなければ、ならないこともたくさん出てきます。このことが実は先生たちの研究上に与える影響は、はっきりとはしませんけれども甚大なものがあるようです。それは、教授会等の活気からみてよくわかるわけです。特にスライドの編成、農民のところへ何を持って行けばいいのかというような、学会の発表とは違った材料に農村をめぐる心がけるとか、あるいはいろいろな文献等をひっさげて、自分の講義の材料を整えることのために、たいへんな時間を喜んで、集中される方が少なからずあるように思います。私の方では各公開講座のたびごとに、受講生 100 幾名おりますから、どの講義が一番いいのか、点数をつけていただくようにしております。先生の高踏的なインテリ特有の体質が次第にとれて農民の言葉を、農民に通ずる言葉で話す、大学教師の教育力が磨かれてゆくわけでございます。それからこう言っては悪いんですけども、農学部の中にも物理系の先生が、例えば農業機械系統、農作業系、農業気象系、といった先生が多いのですが、こうした工学系、物理系の先生はどうも数式を使いやすい。それは言葉を知らないから数におきかえているのだろうとさえ思えるわけです。これは極端な言い方で恐縮ですけども、そういう点についても遠慮なく、私の方で指摘をさせていただいております。まさに、大学教師がこのことを通して自分の教育を、教育対象に対して、どう私的営為を行い得るのかという、技術的面的についての反省を行なっているわけです。農学部は教育技術について無関係だと言ってきた今日を、そういう点に重大な関心と腕をみがいていかなければいけない空気を教授会の中に、どう作っていくかということも、講座を通して強く求められてきているわけです。

こういう岩手大学の公開講座が行われましてから、待ちきれない形で「一の関」等が「農協大学」を作りましたと申しましたが、その後、金ヶ崎町に農家大学 2 ヶ年課程ができています。専業農家の教育が、月に 2 回位の講義で展開されてきております。農学部長は農民の決議によって学長になっています。それからさらに前沢町にも農協中心に「農業大学」ができていますし、江刺にも「農民大学」ができております。衣川町にも「農民大学」ができ、或いは東磐井等にも「農民大学」ができあがって、更に農協全体としましては、岩手県全体に「岩手農民大学」が結成されております。わたしは学長をやっておりますけれども、講師陣は、岩手大学全体、人文社会科学部、教育学部等の教官が配置されています。また、東北農業試験場や気象台等の関係者にも協力をお願いしています。昨年は冷害でした。で、岩手大学では、国立の試験機関、農業研究機関が園芸、林業、果樹や農業について、国立の 4 つの試験機関と協同して冷害シンポジウムを、300 名近い研究者を招いて行ないました。それに対置します農民による冷害シンポジウムを、岩手農民大学が主催して開催しました。そのときは約 300 名近い農民と学者が集まりました。講師は全部農民です。そして昭和 9 年の冷害から今日までの冷害について、また昨年の冷害のときでも無収穫地帯で 650 kg をとった農民の話など、こうした研究発表を、一人一時間位の発表で行い、それで質問を展開することでした。つまり農民による冷害シンポジウムで、科学者がむしろこれを聞く立場をとったわけです。

そのように、岩手大学農学部の公開講座の種を播いてから各農協を軸として、県全体に、あるいは郡単位に、あるいは市町村単位に、農民の大学が生まれてきました。講師も岩手大学を中心として、県や国の試験研究機関がこれに力をかけて進めております。今、準備中の農民大学が、農協を軸に計画されているのも数件あります。もはや大学が公開講座を準備しなくてもいろいろの農村が、農協の組織を使って、自立的に大学の公開講座と似たような大学を作って、自分たちで先生を選んでくるいきおいです。その農民のプランに大学の先生たちが動員されてゆくか、または教授会が協力するという形をとってゆくのではないのでしょうか。農民の自

主的な学習組織が生まれ、動いているといえます。秋田県の横手市の市長さんから、岩手大学の「営農大学公開講座」を、市政 30 年を迎えるので何とか是非来て欲しいという、希望が伝えられました。

考えてみますと、国立大学ですからどの県であろうとも、有難い誘致に対しては応えるべきですが、岩手大学はやはり岩手という所だと、それが礼儀だろうと考えました。しかし秋田大学には農学部がありませんので、弘前大学の農学部と山形大学の農学部それぞれの学部長さんをお願いをして、3 大学連合の公開講座を考えました。各教授会で御意見を承って、6 月中旬までに教授会決議をおよせいただきたいをお願いしたら、喜んで大学の特徴を生かして、3 大学連合公開講座に参加するというご決定を得ました。3 大学学部長と教授会代表、横手市長が懇談会をもって、第 5 回目の「営農大学公開講座」を開催することを決定しました。昭和 57 年 1 月 20 日からそういう形でやることにしています。名前を「岩手、弘前、山形 3 大学連合公開講座」というようにしたわけです。私たちが「連合」という言葉を作ったのではありません。東京農工大学を中心としまして、全国国立農水産系学部の連合大学院博士課程の設置要求が、10 年間にわたっている運動があります。全国の国立大学の農学修士過程をもっている大学が、農工大学に登録しまして、博士課程が欲しいと連合して、一つの大学院の博士課程を作ろうという発想ですすめられてきています。現に文部省は教授 1 つ定員をつけ、農工大学に「創設準備室」を設けています。が、それは設置認定をされたわけではありません。しかし岩手大学と山形大学、弘前大学の三大学農学部は、博士課程を農学部に作ることが、国の体制、或いはオーバードクターの諸問題、そして我々の当面する農学部としての任務からいって、それに参画することはできないと言いつづけてきました。我々は博士課程が欲しいという子どもらしさでなく、教育と研究を地域にどう寄与さすかの問題として考えるべきと主張してきました。東北 3 大学はこの運動に参加しなかったわけです。この 3 大学が寄りあって、三大学連合を地底から起こしてみようということです。

さて、公開講座は、大学に何をもたらすかに話を向けましょう。

4 公開講座をどう大学の教育実践に生かすか。 私どもは公開講座が終った、それで今年の大学の社会的サービスは終ったとは思いません。農民は都市の住民と違って、或いは市民的教養の講座と違い、やはり作物をつくり、家畜を飼い、その土地から動けない人であります。農民は地元に関心をもち、責任をもてる人間の存在であります。それだけに、農民に対する公開講座の責任は教育の上からも、大学がその人たちとの研究上かわる点でも、単に公開講座の時だけで他は講師と受講生の間が切れるという、無責任な教育展開はできません。われわれもまた、地元を動くことのできない農民と同じ立場で、教育に関心をもち、責任を持たなければならないわけです。だからすでに申しました受講生は同窓会を作ります。或いは青空市場を大学におしかけてひらきます。また、その他の自主的な学習の「農民大学」を組織していきます。それとともに大学の教師たちが、出かけて行って、教育の関係を結びあて行く。私たち自身がこのような農民との関係でまた磨かれることがどうしても必要になってきます。この点が、わたしたちの「公開講座」における農民の期待でもありますし、大学側の態度であり、重点を置いている点でもあります。「公開講座」の部分にだけ力を入れるのではなく、永続教育の一つの形態の創出に、「公開講座」を企画していく意味を求めているわけでもあります。

それから講師の選定では希望者を募って、という自由な形でなくて、いやだといっても、出ていただかなければならないことも大切です。さらに全学的な協力がどうしても必要になって



くることは当然です。俺は基礎研究やっているから嫌だという人ほど、出かけて農民にふれていただく必要があります。このことでは学部長として各先生をスカウトしてでも、講師配置を行って、農民に話す体験を積んでいただかねばなりません。それが、学生の教育にもはねかえってくるという訓練は、大学教師としてさらに教授会としての相互責任だと思うわけです。これは教授会の重要な協同責任としての「公開講座」推進の課題だと思っています。

「教え方」の技術についての変化がみられます。農民を集団として教えることは容易ではありません。この体験は大学教育の中にも生きてきましょう。とくに手とり足とりの過保護を経てきた学生が大学に多く来て、つつ放されて右往左往する状態が少なくありません。高等学校卒の年代でも、昔の学生とちがって、大学教師の「教え方」が大事になります。大学と言えども学校教師の、教育対象に即した教育力を磨いていかなければならない時代でしょう。大学教育の実践をどう展開するか、授業の進め方、話し方の学習を展開しなくちゃいけない大学の時代です。マサチューセッツの大学では大学の教師の授業の仕方まで示されています。また教室の光線のとり方とか、黒板の字の大きさ、そこから先生達の話す呼吸の度合、こういった大学「教師必携」がマサチューセッツでは大学の先生たちに渡されて、勉強するようになっています。そういう点では大学教師もベテランの学校教師から教育実践力を学んでいかなければいけないのではないのでしょうか。そこまでいなくとも、「公開講座」の体験で、教師が教育力をつける、一つの試練の場でもあります。

農学部教授会は「公開講座」に熱意をあげて改革と考えていると思われましようが、それだけが農学部の改革ではありません。大学紛争の時以来、大学改革の問題を考えて、私どもは、具体的にどのようにして、改革を遂げうるかの課題に取りくんで実践しているわけです。その一つが「公開講座」です。それからもう一つを紹介しましょう。農民を大学の教師に発令している点です。小学校しか出てない農民も8名、わが農学部の授業15時間を担当しています。岩手県だけでなく、秋田県、それから例えば新利根農場の共同経営者上野満先生などです。上野さんは利根川の沼地帯に開拓団をひきつれまして、沼地帯を開発し、自力で土地改良をしつつ、協同経営を展開して、一戸あたり2,000万の粗収入をあげる力を築く、そういう協同経営をつくった、いわば現代の聖農です。わが農学部の講師になって、講義を担当してもらっています。酪農経営、或いは肉牛、花、単位農協の組合長、養蜂家、こうした篤農家を動員しまして、農学部の講師として授業してもらっています。私達が非常勤講師をお願いするのは、大学の先生等を講義の補完部分として、また、学術交流という大きな目的をとまっています。それだけが大学の任務ではないので、我々のできない部分として農民が教壇に立って、将来の農業指導者になりうる若い学生たちに、農民の立場からの苦痛に満ちた農村のくらし、生産の問題を、卒直に話をしてもらい、試験も行ってもらい、点数までつけてもらおうということをやっているわけです。これの学生に与える影響力は非常に大きくて、単位に無関係であっても進んで学生が聞く機会を作っているわけです。

それからもう1つ「専門技術講座」というのを、公開講座の中では行っています。現在は、東北地方におります獣医師の再教育を行う「公開講座」を、泊りがけ4日間の連続です。目下獣医の再教育センター講座をやっているわけで、岩手大学の獣医学科は、家畜病院があり、医学部の附属病院の真似をした形であります。しかし、どこの大学の獣医学科もみんな家畜病院があって、外科があり、内科があり、レントゲンもあります。そこで単に、犬や猫なんかを見ていたのではだめなんだ、「はだしの獣医になれ」ということで、大学院の学生と先生達と、そして学生諸君が4年課程に入りますと、農村に牛や馬、或いは肉牛の産業動物に対し、農村を

歩きながら診療・治療をするのです。つまり、「はだしの獣医」となって、農協・農業共済、村の獣医師や農民と連携をとり、実践的診療を岩手県農村に広く行っているわけです。「移動家畜病院」ということで文部省では診療車を予算化してくれました。村の巡回指導と診療を行っている仕事も大学のあり方の一つでもあります。年間 600 頭から 800 頭の大動物を治療しています。これほどの大量処理は岩手大学農学部以外にありません。多くの大学は犬猫だけでしょう。

私どもは単に「公開講座」で農民との深いつながりをもつというだけではありません。大学の講義の部分も、篤農家にこれを担当させて、学生に刺激を与える機会をひろげています。わたしたちの講義そのものを批判の対象にさらしていく必要もあります。現在の学生の励みにも、勉学への意欲をかきたたせることにもなりましょう。予算があれば、全国の篤農家をスカウトして、わが農学部の教壇に立てたいと思っています。天下に名をなす篤農家を大学の中に講師として招き入れることも、大学の新しい教育のあり方を考える一つだと思っています。

ついでに申しあげますと、私の方の教授会は、事務官等、新しく配置されて来ますと教授会に、事務局長も担当事務局部長も出席して、教授会がどういうものであるかについて、ご紹介と同時に、教授会の状況について知識を持っていただくように、相互理解の機会をもっています。また教授会の冒頭は、学部長から指名した教官が、研究発表を 10 分間必ずやります。そういうことを義務づけています。と申しますのは、教育の日常における相互の体験機会を広げているわけでございます。これがまた「公開講座」への大きな養分になっていくと思っています。

日常の大学改革、教授会を単なる儀礼的な決議機構としてではなく、もっと教育的なものに、さらに教授たちのそれぞれの研究の交流を軸として、さらに大学事務局の関係者が教授会に深い理解を学ぶ、教育的場としての積極性をもたなければ、大学はドグマにおち入り易い性格を備えていると思っています。農民講師がいますように、そのようなつながりもあって、そのことによって教育が刺激されてゆく、したがって、教授会全体が教育的に動いていく、農学部がそういう変質を遂げていくことが、やはり農村に大きい前進を促し、教授会もまた大きく変わっていく関係が保たれているのではなかろうかと考えるのです。しかしなにせ農学部の構成は専門技術者や、技術研究者です。ですから、もののとらえ方が狭く、また大学は基礎研究をやるところで、実学をやるところではないのだという、強いご非難も十分に受けます。また、農学部関係の会議、学部長会議等々で以上のような話等を取りあげても、無関心が大多数であるという現実もあるわけです。岩手大学農学部は、連合大学博士課程等にそっぽを向いていながら、農民のところへ行って一生懸命旗をふっているという、軽蔑の眼で見られることが多々あることも、十分知っているわけですが、我々はあえて、実学を徹底してきています。そして実学を通して学問と研究で勝負をしていく。そして現在ある農学の虚構の学問、「虚学」に学問を対置するであろうと宣言しているわけです。それが地域の大学の学問等々の、あり方であると思っています。今、農学部は、本当に農学部として生きていくということのためには、諸科学とはちょっと違った農民と密着しながら、これを元気づけ、支えていくことが必要であると思います。そのような農学部が日本に一つくらいはあってもいいと、いう位に割りきっていただいているわけです。

(これは、昭和 56 年 6 月 12 日に行なわれた運営委員研究会における講演を、録音テープから原稿化したものである。)